



## その他 バングラデシュ人民共和国グラミンカレド ニア看護大学教員招聘研修:平成23 年度国立看護大 学校広報・国際交流委員会活動報告

著者	綿貫 成明, 清水 真由美, 飯野 京子, 宮首 由美子 , 須藤 恭子, 能見 清子, 池田 菜奈
雑誌名	国立看護大学校研究紀要
巻	12
号	1
ページ	34-41
発行年	2013-03-25
URL	<a href="http://doi.org/10.34514/00000160">http://doi.org/10.34514/00000160</a>



# Bangladesh 人民共和国 グラミンカレドニア看護大学教員招聘研修 (平成 23 年度国立看護大学校広報・国際交流委員会活動報告)

綿貫成明<sup>1</sup> 清水真由美<sup>2</sup> 飯野京子<sup>1</sup> 宮首由美子<sup>3</sup>  
須藤恭子<sup>1</sup> 能見清子<sup>1</sup> 池田菜奈<sup>1</sup>

1 国立看護大学校；〒 204-8575 東京都清瀬市梅園 1-2-1  
2 元 国立看護大学校  
3 自衛隊中央病院  
watanukis@adm.ncn.ac.jp

---

## An Invitation Program for the Faculty Development of the Grameen Caledonian College of Nursing in People's Republic of Bangladesh

(Year 2012's Activity Report from the National College of Nursing, International Affairs and Public Relations Committee)

Shigeaki Watanuki<sup>1</sup> Mayumi Shimizu<sup>2</sup> Keiko Iino<sup>1</sup> Yumiko Miyakubi<sup>3</sup> Kyoko Sudo<sup>1</sup> Kiyoko Nohmi<sup>1</sup> Nana Ikeda<sup>1</sup>

1 National College of Nursing, Japan : 1-2-1 Umezono, Kiyose-shi, Tokyo, 〒 204-8575, Japan

2 Formerly, National College of Nursing, Japan

3 Self-Defense Forces Central Hospital

---

【Keywords】 Bangladesh, グラミン銀行 Grameen Bank, 看護師養成教育 nursing education, 教員招聘研修 invitation program for faculty development

### I. はじめに

国立国際医療研究センター (National Center for Global Health and Medicine) は、 Bangladesh 人民共和国 (以下、 Bangladesh) グラミン銀行グループと 2010 年秋に保健分野における共同事業のための調査を開始した。その一環として、国立看護大学校 (以下、本学) は、グラミンカレドニア看護大学 (Grameen Caledonian College of Nursing) に対して本学の教員を派遣すること、およびグラミンカレドニア看護大学教員を本学に招聘し研修プログラムを提供するなどの技術支援を行うこととなった (清水ら, 2012)。

実際的な共同事業の第一歩として、2011 年 1 月に本学の教員 2 名がグラミンカレドニア看護大学に派遣され、教員に対する授業計画書の作成、授業評価に関するワークショップなどの技術支援を行った (清水ら, 2012)。この技術支援のための継続的なフォローアップとして、このワークショップに参加した現地教員のうち、2 名を 2012 年 2 月に本学に招聘した。具体的には、看護基礎教育各科目の

目的・目標や構成、活動内容についての学びを深めることを目的として、講義・演習・臨地実習の実際と一連の看護教育の展開に関する研修を本学の広報・国際交流委員会活動の一環として実施した。

本稿では、グラミンカレドニア看護大学教員の本学における招聘研修の概要を紹介するとともに、今後の課題について報告する。

### II. Bangladesh 人民共和国における看護教育の現状

Bangladesh では、看護師の絶対数の不足が 6 万人と言われている (Oulton, 2010)。同国の看護師と医師の比率は 1:2 であり、日本の状況とは逆転しており、また人口 10 万あたりの看護師登録数は 17.1 人と、日本における同数 687.0 人の約 40 分の 1 である (Government of People's Republic of Bangladesh, n.d.; 厚生労働省, n.d.)。夜勤という労働体系や身体の清潔ケアなども行うといった看護師の業務内容の特徴が、同国の社会規範と対立するために、看護師の社会的地位が低く見られ、社会的なスティグマとなっ

てきた経緯がある (Hadley et al., 2007)。

バングラデシュにおける看護師養成教育制度は、WHOの技術協力の下、2006年に Diploma in Nursing Science and Midwifery Curriculum という新カリキュラムに改正され、2008年1月から施行となった。新カリキュラムにおける入学資格として、入学前に必要な基礎教育は12年間であり、また入学後の就業年限は3年間とし、助産学も組み入れられている。さらに、同カリキュラムの修了後には、1年間の Post Basic Nursing & Midwifery Education を修了することで学士号を習得できる (Bangladesh Nursing Council, 2006; 清水ら, 2012; 橋本ら, 2012)。

グラミンカレドニア看護大学は、ソーシャルビジネスとして看護教育等にも取り組んできたグラミン銀行グループの、看護大学設置構想のモデル校として位置づけられている (Grameen Caledonian College of Nursing, 2010)。そのことにより、同国の看護師不足の解消に加え、優秀な人材 (同銀行から融資を受けている農村地帯の家庭の少女たち) に、専門的職業に従事する機会を提供し、経済的な自立を促進するとともに、家族・地域の支援、そして国レベルでの開発に貢献できる人材の育成を理念としている (Grameen Caledonian College of Nursing, 2010)。

### Ⅲ. 研修の概要

#### 1. 研修の目的

グラミンカレドニア看護大学から本学に招聘された教員が、看護基礎教育を中心とした講義・演習・実習の実際について、計画から実施・評価までの一連の看護教育の展開に関して学び、バングラデシュにおける教育方法に関する示唆を得ることを目的とした。

#### 2. 研修の目標

- 1) 日本の保健医療制度、看護学教育の概要を学ぶ。
- 2) 本学の看護学部 (各専門領域・分野)、研究課程部 (修士課程)、研修部等の基本計画、科目の体系化とカリキュラムを学ぶ。
- 3) 本学の看護学部教育における授業計画、学生の達成度評価、視聴覚機器・教材の活用等に関わる教授技術について学ぶ。
- 4) 本学の臨地実習の計画・実施・評価、指導体制 (教員・臨床教員と臨床指導者の役割と責任、活動内容の実際)、学生の学習環境等について学ぶ。
- 5) 本学の看護学部教育における筆記試験や臨地実習評価に関連した、採点や評価方法についての具体的な知識を得る。
- 6) 以上の目標に基づく活動を通して、グラミンカレドニア看護大学に適用できる、看護教育の質を高めるため

の示唆を得る。

### 3. 研修生と研修期間

グラミンカレドニア看護大学の Lecturer (講師) である Poly Immaculata Costa 氏 (看護師) と Director (運営部長) である Nazmul Huda 氏 (医師) の2名 (以下、研修生) を本学に招聘した。研修期間は、2012年2月16日 (木) から3月2日 (金) の16日間とした。

## Ⅳ. 研修に向けての企画・準備

### 1. 研修ニーズの把握と企画・調整

グラミンカレドニア看護大学学長の Parfitt 氏に要望を伺い、招聘期間中に本学が提供できる研修項目の例として、日本の医療保健看護制度、各領域の講義、および病院実習における管理・指導体制の見学などの研修案を提示した。研修生の職位としては、教育実務担当者の教員と、管理運営担当者の2名とすることとした。また研修生の資格として、英語で研修が受けられる能力を求めた。その上で、グラミンカレドニア看護大学からの招聘教員2名の決定後、個別に研修の目的を伺い、それらを加味した研修プログラムを企画・調整した (表1)。

### 2. 研修環境の準備

研修の受け入れに当たっては、研修内容の企画・調整ならびに関係機関との連絡について、国外招聘事業の経験がある教員を中心に、国立国際医療研究センター国際医療協力部と連携しながら進めた。渡航手続き、宿泊施設準備、研修環境の調整などを含め、多岐・細部にわたり準備を行った (表2)。

研修内容および講義資料については英訳し、専門用語を含めて専門領域の教員の確認を得た。研修生が滞在中使用する研究室を用意し、パーソナルコンピュータのソフトウェアを英語対応に切り替える手配も行った。さらに、広報・国際交流委員会で協議し、通訳者と日々の運営支援担当者を決め、研修全般が円滑に進むよう配慮に努めた。

研修の日程については、できるだけ余裕をもって計画し、睡眠・食事等の生活面にも留意しながら支援した。

## V. 看護基礎教育に関する研修の実際

研修プログラムは、日本における保健医療システムや看護師養成制度などの教育の背景とともに、看護学部教育に関する内容を中心とした (表1)。研修初日には歓迎昼食会を開催し、研修生と本学の教職員が一堂に会した (写真1)。

表1 グラミンカレドニア看護大学教員研修のプログラム概要

研修内容・日程

内容	方法	講師・担当者 <sup>注1</sup>	日程
日本の保健医療システム	講義	国立国際医療研究センター 国際医療協力部 明石派遣協力専門職	2月23日(木)
日本の看護人材開発政策の変遷	講義	田村大学校長	2月17日(金)
看護学部			
看護学部教育カリキュラムの紹介	講義	濱本看護学部長	2月17日(金)
実習計画・指導案について	講義	林教授	2月17日(金)
領域別の講義・演習・臨地実習とその評価方法			
基礎看護学 (生活援助論, 基礎科学実験実習)	講義・演習 見学	濱本教授・森講師・ 宮首講師・能見助教	2月29日(水)
成人看護学	講義	飯野教授	2月20日(月)
母性看護学	講義	佐々木教授・池田助手	2月28日(火)
小児看護学	講義	来生准教授・遠藤講師	2月28日(火)
看護学実習の実際 (成人看護学実習Ⅰ: 国立がん研究センター中央病院)	実習見学・ カンファレンス参加	成人看護学教員 広報・国際交流委員会	2月20日(月) ~22日(水)
研究課程部			
研究課程部の紹介	講義	佐藤研究課程部長	3月1日(木)
授業の実際 ヘルスアセスメント	講義・演習	飯野教授・綿貫教授・ 小山講師	2月27日(月)
臨床看護研究推進センター			
臨床看護研究推進センターの紹介	講義	小澤臨床看護研究推進 センター長	2月24日(金)
研修部			
研修部の紹介	講義	西岡研修部長	2月27日(月)
施設等見学			
国立看護大学校	見学		2月17日(金)
国立国際医療研究センター	見学	広報・国際交流委員会	2月23日(木)
国立がん研究センター中央病院	見学		2月20日(月)
日本看護協会看護研修学校	見学		2月29日(水)
最終評価	意見交換	田村大学校長 他	3月1日(木)
その他			
特別講演		広報・国際交流委員会 学術研究委員会	2月28日(火)
学生との懇談会		広報・国際交流委員会	2月24日(金)

注1. 機関名の記載がないものはすべて国立看護大学校の教員である。また 職位は平成23年度現在のものである。

1. 看護学部教育と各専門領域科目の概要

看護学部教育の内容として、日本における看護基礎教育のシステムとともに本学の教育課程の紹介を含め、基礎看護学、成人看護学、小児看護学、母性看護学に関する授業(講義・演習・臨地実習)の実施から評価に関する講義を計画した。各専門領域に関する講義内容については、各領域の科目構成、各科目の目的・目標、それに基づいた授業(講義・演習・臨地実習)の内容と展開方法、評価方法などを説明した。また、各領域の学内実習室において、演習に使用する物品を実際に提示しながらの見学・説明を行った(写真2, 3)。

研修生からは、バングラデシュに比べて日本は、より明確な看護教育システムをもっている点が印象的であるとい



写真1 歓迎昼食会の後、教職員とともに

表2 グラミンカレドニア看護大学教員招聘研修の準備活動の概要

項目	主な内容
渡航関連	航空券の予約・購入 査証取得のための書類作成，書類の内容確認，書類送付 短期滞在外国人向けの医療生命保険への加入手続き 預け入れ荷物の重量・個数制限の連絡
宿泊施設	宿泊施設の予約，宿泊施設の備品確認と調整（調達，研修生への連絡） 宿泊施設利用手続きの支援（鍵の準備，規定の説明等）
研修環境	研究室の手配・清掃依頼，備品・日用品の準備 コンピュータ端末の使用準備（英語版対応の準備，使用手続き）
研修内容	研修の目的・内容・スケジュールの調整と確定 派遣元および派遣受入れ機関の責任者・幹部・関係者への説明 講義担当者・担当領域への依頼，講義室の予約 研修病院との調整（目的・内容・スケジュールの説明・依頼） 研修の許可依頼および抗体価等の書類手続き 研修生による特別講義の企画・広報，会場予約，通訳手配，資料準備と当日運営 研修生によるプログラム評価（調査票およびヒアリング）
英文資料	日本の看護・保健システム関連資料の英語版準備 各講義資料および関連参考資料の英訳（業者手配，専門用語等の確認・修正）
生活関連	食品・薬物等によるアレルギーおよび宗教上の理由等，生活上の制約の確認 空港・研修宿泊施設間の交通機関の手配 食事の手配（食材の買出し，昼食の予約） 防寒衣類・日用品の寄付提供の呼びかけ 休日および観光の計画・手配
懇親会	歓迎会・送別会の企画・広報，参加人数の調査，会場・食事等の予約 当日のプログラム考案等
学生との懇談会	学生課との連携で学生の協力要請 文化系サークル（茶道，華道，コーラス等）の企画支援
日当・宿泊費	謝金・日当・宿泊費の計算および受け渡し 必要経費（交通費・研修謝金・手続き料金）の計算・天引き，領収書の作成
その他	寄贈物品のリストおよびレター（寄贈証明）作成，梱包材の手配 寄贈物品の確認，空港への発送・受け取り 預け入れ荷物の規定超過分の料金最終確認



写真2 基礎看護学(生活援助論)の講義・演習に関する説明



写真3 母性看護学の講義・演習に関する説明

う感想があった。

## 2. 講義における教授法の実際

バングラデシュの看護教育では、伝統的に教員の口述による講義と暗記を中心とした学習が主に行われてきたという現状があるが、その一方で教科書や視聴覚教材の活用、クリティカルシンキングに焦点を当てた教育的な取り組みが報告され始めている (Berland et al., 2010; Grameen Caledonian College of Nursing, 2010)。そのため、今回の研修において、教授法の工夫について学びたいという研修生のニーズがあった。学生の理解を効果的に高めるための工夫として、講義で使用する図書の選定や資料の準備において配慮や工夫をすること、学生の視覚的な理解を促すために図表を活用すること、学生の自己学習が促進できるように授業時間外に実習室・図書館・LL教室などを活用すること、視聴覚機材 (DVD, パワーポイント等) を活用することについて、研修生が実際に体験し見学できるようにした。

## 3. 演習科目の実際

授業科目において、認知領域に働きかける講義形式の授業のみでなく、精神運動領域や情動領域にも働きかける演習の実際についても紹介した。研修期間中に開講されていた看護学部基礎科学実験実習 (1年次・選択科目)のうち、微生物学実習を見学する機会を得た。見学の当日は、手指の常在細菌採取と培養の演習が行われていた。寒天培地 (パームチェック) を用いることにより、手指の汚染状況を可視化し、手洗いの重要性について学生が具体的にイメージできるような工夫の実際を見学した (写真4)。

また、看護学部3年次開講のフィジカルアセスメントの教授法について紹介するとともに、研修期間中に開講されていた本学研究課程部のヘルスアセスメントの講義および演習にも参加する機会を得た。研究課程部生と研修生で、

両国の現状を情報交換しながら講義と演習を展開した。正常所見については学生同士で聴診などの具体的な診察技術を学ぶこと、また異常所見についてはシミュレータを用いて異常心音・呼吸音等を聴診する演習を行っていることを説明した (写真5)。日本では、患者の権利やプライバシー保障の観点から、これらの手技を臨床で実際に体験することが困難な昨今の状況があるため、学内の演習でこれらの学習をする重要性があることを説明した。

## 4. 臨地実習の実際

臨地実習に関する内容には、実習計画・指導案に関する講義、および成人看護学実習 I (国立がん研究センター中央病院での周手術期実習) の見学を企画した (写真6)。バングラデシュの現状として、臨地実習の学生が「労働力」の役割を期待されていると報告されており (宮本ら, 2005)、今回の研修生も同様の現状があると述べていた。そこで、日本における臨地実習は「学習の場」であることを説明し、科目の目的・目標に合わせた実習の内容と展開方法があり、学生のレディネスの把握、受けもち患者の選



写真4 基礎科学実験実習の微生物学実習の見学



写真5 研究課程部のヘルスアセスメントの講義・演習に参加





写真6 臨地実習カンファレンスの終了後、学生・指導者・教員とともに

定、指導上の工夫などの必要性を説明した。特に、実習という「学習」に必要な実習指導体制の組み方、病棟の実習指導者と本学の教員の役割についても説明した。また、実習記録用紙を用いた学生の学習状況を実際に見学し、実習環境の調整については、学生が学習しやすいスペースなどが確保されていることを確認した。カンファレンスの実際についても見学する機会が得られ、学生が患者の全体像をよく捉え、深く学んでいること、退院後と地域・在宅への看護の継続性について考察していることなどについて、研修生は深く感銘を受けていた。

その他、研修生からは、以下のような感想があった。

- 教職員の組織、特に臨床との連携が充実した実習指導体制がある。学生は、講義でも実習でも、人材面・設備面の行き届いた環境の中で学習しており、質の高い教育のための体制づくりをしている様子がわかった。
- 各科目の授業案が構造化されており、また演習・実習で学ぶ技術や行動目標については、チェックリスト等を用いた学生の自己評価と教員による評価が行われており、これらは、教育方法の改善のために必要である。
- 実習に関しては、バングラデシュでは病院の看護職員および看護教員の数が限られ、学生は実習で受けもち患者を通した学習も行うが、労働力としての役割も期待されている。一方、日本では実習目的・目標に沿った実習内容が展開されていた。たとえば、2～3週間の実習期間中に学生が受けもち患者数は1～3人であり、患者をより深く理解できると感じた。

## VI. その他の研修内容

本学は、看護学部以外に前述の研究課程部、その他に臨床看護研究推進センター、研修部等の組織をもつ。それらについても、各々の設置目的と活動内容の概要を理解でき

るよう、研修生に対する講義を設定した。バングラデシュでは、継続教育や大学院教育については、まだ十分な体制が整っていない。研修生は、今後、看護師の能力向上のための研修が必要であると考えており、グラミンカレドニア看護大学でも大学院教育や臨床研究、卒後の継続教育などに取り組んで行きたいので、大変参考になったと述べていた。

また、本学の Faculty Development 活動の一環として、グラミンカレドニア看護大学教員からの特別講演を、広報・国際交流委員会と学術研究委員会で共催した。Huda 氏から「バングラデシュ人民共和国の看護教育におけるマイクロクレジットとソーシャルビジネス—グラミンカレドニア看護大学の挑戦：Microcredit and Social Business—Promoting Nursing Education in Bangladesh」について話題を提供していただいた。また、Costa 氏からは「グラミンカレドニア看護大学の概要：Grameen Caledonian College of Nursing」について紹介があった（写真7）。講演後、学生・教職員との意見交換においては、看護教育上の問題として教員不足があること、地域により政治的対立があること、男子学生の制約があることなどが挙げられた。また、ソーシャルビジネスの投資企業など教育支援に関することや、今後のグラミンカレドニア看護大学の発展や同様の大学設立の予定などについての質問と説明があった。グラミンカレドニア看護大学の教員には英語能力の検定試験を課し、またバングラデシュの高等教育における教科書は英文であり、授業・カンファレンスは英語で行われることなども説明された。

学生との懇談会では、学生と研修生が相互交流をもてるよう、学生の自主的な企画を支援した。懇談会の日程は、本学の春休み期間中であつたが、十数名の学生の参加があつた。茶道サークルによるお茶会、着物の着付け体験、バングラデシュと日本の文化の紹介などもあり、相互交流を行った（写真8）。茶道、着物の着付けを得意とする学生や、海外協力事業の従事経験から、英語の堪能な学生などもおり、楽しくまた活発に交流が図られている様子がうかがえた。また、研修生からは、お茶会での落ち着いた雰囲気や「もてなし」の日本文化に癒やされたこと、バングラデシュの文化や宗教との共通する点も見出せたという印象を語っていた。

## VII. 研修全体の評価

研修最終日に、研修生と研修企画担当教員で意見交換を行い、研修の目標達成状況と評価を行った。研修内容について、「ニーズの適合度」と「理解度」の観点から研修生に評価を依頼したところ、評価の得点は全般的に高かつた。また、評価表の自由記載を参照しながら、意見交換も



写真7 グラミンカレドニア看護大学教員による特別講演の様子



写真8 学生との懇談会に参加

行った。主な評価内容について、以下に述べる。

### 1. 研修目的・内容の適合性

研修生にとって、研修目的・内容は、グラミンカレドニア看護大学の教育の質をいかに向上させるかという点において非常に適切であった。また、複数の専門領域の内容について、深く学ぶ機会となった。

### 2. 研修資料・教材

研修中に説明する内容や講義内容については、可能な限り英語資料を準備した。一部の講義には英語資料を用いず、その場で逐次通訳することもあった。研修生は、英語の資料が揃っていれば、理解がより深まったであろうとの感想を述べた。

研修生が現地に帰国した後、すぐ活用できるように資料の電子データの希望があった。しかし、今回準備した資料は、電子版の公表を前提としておらず、公表するためには許諾等の手続きも必要なため、今後の検討が必要である。

### 3. 研修の成果の活用および今後の課題

以上のとおり、研修の内容に関してはいずれも概ね良好な評価が得られた。これは、事前調査を踏まえて、研修生のニーズに沿った研修が企画できた成果であったと考える。また、本学の多くの教員から研修生の日常生活に関する多様な支援があり、それらも含め効果的な研修になったのではないかと考える。

今後さらに取り組むべき課題として、以下の点が挙げられた。

#### 1) 継続的な相互交流

両国間の国際交流を深めるとともに、今後の両校の連携（共同研究、共同事業など）を継続したい。たとえば、若手教員の実践的な研修、グラミンカレドニア看護大学の学生の短期留学や教員の研修、これらの活動を支える企業の協賛などによる資金源の確保が挙げられた。

#### 2) 臨床研修の事前準備とサポート体制

臨床において患者のベッドサイドでの見学・活動も含む研修を企画する場合は、感染症に対する抗体価獲得の証明が必須であり、それにより研修生が立ち入ることのできるエリアが限定された。研修生が自国で抗体価検査を行うことが困難な場合もあり、研修計画の早期段階での検討が必要である。また、看護実践の内容、看護師の役割が日本と異なる文化背景の研修生にとって、どのような臨床研修を企画すると効果的でニーズに合致するかについては、今後引き続き検討が必要である。

## VIII. おわりに

以上、グラミンカレドニア看護大学の教員招聘研修の概要とその成果について述べた。研修生の具体的な要望を事前に伺いながら企画・準備し、双方にとってほぼ満足のいく状態で終了することができた。また、本学の教職員が、



バングラデシュにおける看護実践・看護教育の一端に触れて刺激を受けるとともに、多様な価値観や考え方で物事を捉える機会の一つとしても貴重な機会であった。今回の研修が、グラミンカレドニア看護大学のさらなる発展に寄与できれば幸いである。

## 謝 辞

本報告は、国際医療研究開発費（21指-8国際保健医療協力従事者の研究能力強化支援体制構築に関する研究：主任研究者 明石秀親，および22指-6我が国の国際保健協力人材の継続的確保に関する研究：主任研究者 仲佐保）による研究の一環として行われた活動成果である。

本プログラムにご参加・ご協力下さった方々、また様々な面で支援して下さいました方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

## ■文 献

- Bangladesh Nursing Council (2006). Diploma in nursing science and midwifery curriculum 2006. Retrieved September 30, 2012, from <http://www.bnmcbd.com/files/diploma-curriculum.pdf>
- Berland, A., Richards, J., & Lund, K. D. (2010). A Canada-Bangladesh partnership for nurse education; case study. *International Nursing Review*, 57, 352-358.
- Government of People's Republic of Bangladesh, Ministry of Health & Family Welfare (n.d.). *Health Bulletin 2010*. Retrieved September 30, 2012, from [http://nasmis.dghs.gov.bd/dghs\\_new/dmdocuments/health\\_bulletin\\_2010%](http://nasmis.dghs.gov.bd/dghs_new/dmdocuments/health_bulletin_2010%20new(1).pdf)

20new(1).pdf

- Grameen Caledonian College of Nursing. (2010). *GCCN Newsletter*. Retrieved September 30, 2012, from [http://www.gcu.ac.uk/grameencaledonianpartnership/grameencaledoniancollegeofnursing/newsletter/gccn\\_newsletter\\_autumn\\_2010.pdf](http://www.gcu.ac.uk/grameencaledonianpartnership/grameencaledoniancollegeofnursing/newsletter/gccn_newsletter_autumn_2010.pdf)
- Hadley, M.B., Blum, L.S., Mujaddid, S., Parveen, S., Nuremowla, S., Haque, M.E., & Ullah, M. (2007). Why Bangladeshi nurses avoid 'nursing': Social and structural factors on hospital wards in Bangladesh. *Social Science & Medicine*, 64, 1166-1177.
- 橋本千代子, 松本康代 (2012). バングラデシュの看護・助産教育制度の現状と課題. *Journal of International Health*, 27(1), 87-92.
- 厚生労働省 (n.d.). 医療関係従事者 概要. Retrieved September 30, 2012, from <http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/10-2/kousei-data/PDF/22010209.pdf>
- 宮本恵子, 山田巧, 稲岡光子 (2005). 開発途上国の看護基礎教育をとりまく状況調査：バングラデシュ. *国立看護大学校研究紀要*, 9(1), 77-81.
- Oulton, J. 著／穴吹章子, 岩國亜紀子, 濱吉美穂, 片田範子 訳 (2010). なぜグローバルヘルスが看護の重要な課題なのか？看護教育, 51(7), 566-571.
- 清水真由美, 亀岡智美 (2012). 活動報告：バングラデシュ人民共和国グラミンカレドニア看護大学との協力連携. *国立看護大学校研究紀要*, 11(1), 37-42.

---

**【要旨】** 国立看護大学校（本学）は、バングラデシュ人民共和国のグラミン銀行グループと国立国際医療研究センターとの共同事業の一環として、グラミンカレドニア看護大学（Grameen Caledonian College of Nursing, GCCN）と協力連携している。2011年1月、本学の教員2名がGCCNに派遣され、授業計画案の作成や授業評価に関するワークショップなどの技術支援を行った。その継続支援として、2012年2月、GCCN教員を本学に招聘し、フォローアップ研修を行った。その目的は、GCCN教員が看護基礎教育を中心に看護学教育に対する学びを深め、GCCNにおける看護学教員の能力向上、および教育への示唆を得ることであった。主な研修内容として、GCCN教員は本学看護学部の講義・演習・実習についての概要を把握するとともに臨地実習の見学を行った。また、本学研究課程部の教育・研究、臨床看護研究推進センターや研修部における看護師の継続教育・研究支援の概要についても学習した。以上の研修をもとに、GCCN教員と本学の研修企画教員は、GCCNにおける看護教育の充実への示唆について検討した。本研修は、GCCN・本学の双方にとって今後の相互交流と関係性の発展のための貴重な機会となった。

---

受付日 2012年10月9日 採用決定日 2012年11月14日

